



Interview
インタビュー

佐藤勝昭さん(工学博士 洋画家)「アルテリッカ新ゆり美術展」実行委員会委員長」
麻生の美術力を結集した「アルテリッカ新ゆり美術展」
地域に根を張った文化の深さと広さを感じてほしい

夢

前回のアルテリッカ新ゆり美術展より

麻生の美術力を結集した「アルテリッカ新ゆり美術展」 地域に根を張った文化の深さと広さを感じてほしい

(インタビュー) 佐藤 勝昭さん 工学博士 洋画家(「アルテリッカ新ゆり美術展」実行委員会委員長)

今年6回目を迎える「川崎・しんゆり芸術祭(アルテリッカしんゆり)」は、オペラ、バレエ、クラシック、ジャズ、演劇、古典芸能など多くの舞台芸術がそろった他に類を見ない総合芸術祭ですが、そのプレ・イベントとして3/3(月)から9日(日)まで開催される「アルテリッカ新ゆり美術展」では、優れた美術作品の数々を鑑賞することができます。今回はその美術展の実行委員会委員長を務める佐藤勝昭先生を訪ね、工学博士であり洋画家という佐藤先生の珍しいキャリアについて、および、「アルテリッカ新ゆり美術展」の見どころについてお話を伺いました。

●佐藤先生は工学博士でありながら、洋画家としても活躍されています。

始まりは逆なんです。子どものころから絵が好きで、いつも花やら何やら描いていたんです。親の転勤で大阪に転校した小学校3年のとき、児童画教室に入会しました。そこで指導していただいた新制作画協会の伊藤 健郎先生に「君の水彩画は大胆だから油絵をやってみたら」と勧められ、母にねだって道具を一式そろえてもらいました。

●昭和何年くらいのことですか？

昭和26年ですね。まだ戦後が完全に終わっていないころです。実は母が神戸女学院時代に絵を描いていて、

結婚を機にやめたので、息子に絵を託したようなところがあるんですね。だから大阪市立美術館で有名な画家の展覧会があると、必ず連れて行ってくれました。とくに印象に残っているのはゴッホです。ふつうゴッホといえば「ヒマワリ」ですが、私は「夜のカフェテラス」の黄色と青色の強烈な色彩が印象的だったことを、今も鮮烈に覚えています。

中学に入って画塾はやめました。絵は細々と描いていました。高校は府立北野高校に進み、選択授業に美術を選んで油絵を描いていました。そのときの先生が国画会の岡島吉郎先生で、そこで大胆な色彩を多用するフォーヴィスム(野獣派)の影響を受けました。

●その一方で、工学博士になられた背景は？

もともとラジオ少年で、中学時代は鉄道模型づくりで熱中しました。高校時代には、定期購読していた「無線と実験」という雑誌で電気回路を勉強していましたので、ためらうことなく京大の電気工学科に入りました。しかし、回路の授業は知っていることばかりだったので、理学部の授業を受講したりして応用物理学の方向に進み、修士課程では強誘電性半導体の研究をしていました。一方で人文地理のクラブに入って全国を旅して回り、パステルでスケッチをするような青年でした。

当時の私はテレビに興味があり、大学入学のお祝い金でテレビをこさえたんです。それで卒業後はNHKに入り、大阪放送局の現場で技術者をやってから、NHK放送技術研究所に配属になりました。そこで16年ほど放送技術の研究をしてから、1984年に東京農工大学工学部に移り、助教授から教授、最後は副学長をやらせていただきました。

現在は、国の独法であるJSTの研究開発戦略センターのフェロー(特別研究員)として、ナノテクノロジーと材料分野の研究を俯瞰したり、政府に提言を出したりしています。

●そんな専門的な研究をされていて、絵を描く時間は取れたのですか？

NHK時代の上司が樋渡 涸さんという絵描きで、日本画府(日府展)の理事をしていらしたんです。よく一緒に飲んだのですが、酔っ払っては「日府展に出品しろ。出さなければ勤務評定を下げるぞ」と言われたんです(笑)。それで日府展に出すようになり、また絵を描くことが多くなりました。ちなみに今、私は日府展洋画部の理事を務めています。生活はサイエンスで食っているんですが、絵にかかる費用は絵で賄っている。だからいちおう絵のプロでもあるのです(笑)。

●全く別のジャンルで二足の草鞋を履かれていたのですか。

それが苦にならないと言うよりも、両方やってきて良かったと思っています。

一つ転機になったのが、84年にNHKをやめて農工大に行ったことです。その翌年に、麻生市民館に市民ギャラリーがオープンしたことがきっかけで、麻生区美術家協会が発足し、その初代メンバーに加えていただきました。今は事務局長をしていますが、この30年間、私は会派を超えた先生方の影響を受け、ずいぶん鍛えられたと思っています。

もう一つ転機といえば、「会社を辞めたら濡れ落ち葉」になる」とよく言われていたので、退職後は地域に生きようと、農工大を退職した2007年に麻生区文化協会の会員になり、「からむし」の編集に加わりました。いまは総務として役員会に加わっています。

●「アルテリッカ新ゆり美術展」はどのように始まったのですか？

2008年の10月ごろ、アルテリッカしんゆりが始まる前年に、「麻生区美術家協会と麻生区文化協会が共同でアルテリッカの美術展をやりませんか」という声がかかったんです。これは文化協会の菅原敬子会長の強い働きかけがあったからこそ実現したのですが、美術家協会と文化協会は性格が違うということで、初めは共同でやることに反対の意見もありました。たまたま、私がそれぞれの団体の事務局長と総務という立場だったので、うまくつなぐことが出来たんです。幸いなことに私は学協会の理事や大学の理事・副学長もやりましたから、マネジメントはそれほど嫌じゃないんですね。

●「アルテリッカ新ゆり美術展」はどのような展覧会といえますか？

麻生区には洋画、日本画、彫塑、工芸など多岐のジャンルにわたる多くの芸術家が住んでいます。そういった地域の特性があるためか、都内から訪れた人たちが口をそろえて「質の高い美術展ですね」と驚いて帰られます。

有名作家の作品だけを並べた展覧会はどこか上から目線の感じがするものです。日本の場合、芸術にしても科学にしても上が決めて下に降りてきたものが多いのですが、この「新ゆり美術展」は草の根から生まれた作品展なので、地に根を張った文化の深さと広さを感じることができます。そういうことはこれからも大事にしないといけないので、美術家協会も文化協会も、各会派のどんなに偉い人でも飾りつけや当番は自分でやるということを徹底しています。また、ポスター、ちらし、案内はがきも自分たちでつくっています。

●最後に区民の皆さん、市民の皆さんにメッセージをお願いします。

私たち全員、よい作品をお見せしようと努力していますので、皆さんには鋭い批評をしていただきたいと思っています。また若い世代の人たちにぜひ来てご覧いただきたい。冒頭でお話したように、小学生のときに素晴らしい美術に触れた経験が私の今につながっていますから、きっと若い人が芸術に親しむよききっかけになると思うんです。

美術に限らず、この地域の芸術活動には、バレエでも音楽でも日本舞踊でも質の高さを感じます。そういう芸術家たちが多く住んでいるというバックグラウンドがありますから、私たちも質の高い美術作品を提供しますので、ぜひ楽しんでください。今年の目玉として3/8(土)14時から、美術家協会の作家が作品の前でギャラリートークを行います。特に抽象画などはどのような意図でその絵が描かれたのかが分かりますから、面白いと思いますよ。

佐藤 勝昭(さとう かつあき)

1942年兵庫県生まれ。60年大阪府立北野高校卒。64年京都大学工学部卒。66年同大学大学院修士課程修了後、NHK入局。大阪放送局勤務を経て68年基礎研究所入所。84年東京農工大学工学部助教授となり、89年同教授、2005年同理事・副学長(教育担当)、同大学教育センター長を務め、現在は同名誉教授。07年から科学技術振興機構(JST)において様々なプロジェクトやミッションを担当。専門は応用物性、結晶工学、磁性物性。著書に「太陽電池のキホン」「理科力をきたえるQ&A—きちんと答えられる大人になるための基礎知識」「金色の石に魅せられて」「光と磁気」など。

【画歴】
小学校5年より伊藤健郎の児童画教室で油彩を手がける。大阪府北野高校で岡島吉郎に学ぶ。前職(NHK)美術部で中島哲朗、樋渡 涸二に師事。銀座詩季画廊ほかで個展13回開催。一般社団法人日本画府理事・洋画部審査員。日府賞、記念賞、愛知県知事賞等受賞。



川崎・しんゆり芸術祭(アルテリッカしんゆり) 2014
プレ・イベント
「アルテリッカ新ゆり美術展2014」
3月3日(月)～3月9日(日) 10:00～18:00
(最終日は16:00まで)

- 展示作品
日本画、洋画、彫刻、工芸、書、写真、陶芸、いけ花
- 会場
新百合21ホール(麻生区万福寺1-2-2) 入場無料
TEL:044-952-5000